

## 長唄「吾妻八景」考察

池田弘一

### 緒言

詞章・辞句をたどり一々を確かめていかないと唄えない、唄にならない曲がある。また、そうしたことになる曲が邪魔して、唄えなくなってしまう曲もある。曲はさまざまである。

「吾妻八景」は詞章をたどり、確かめたくなる曲だ。例によって詞章にある地や社寺の類を回ってみた。ほとんどが子どもの時、父に連れられて訪れたところだ。

どこも賑やかになり過ぎていた。あるいは足を止める人のない所になっていた。今の情景を写真にとっても昔を偲ぶよすがにはならない、と思つて川柳の数々を並べてみた。拙い文よりずっとものを言うと思つて。

結局、「季刊邦楽」33号の「吾妻八景」に学ぶところの多いものになった。作曲面に力のない私は杵屋正邦氏の説かれるところに力を得た。

「双六」ということを強く思った。双六遊びは賽の目によつて動くものだ。前に必ず進むとは限らない。二つ三つ飛ぶこともあれば、二回休みもあり、もとへ戻ることもある。「吾妻八景」にもそんなところがあるように思う。

私は作者の目線のゆれの先をさぐり、立ち止まり、作者の思いにかりたてられて歩いてみた。そうしたところに生じた考察である。

目次

一 長唄「吾妻八景」

- (1) 「吾妻八景」の詞章
  - (2) 開曲
  - (3) 作曲者・作詞者
  - (4) 曲名・曲趣
  - (5) 「吾妻八景」の背景
  - (6) 作曲について
  - (7) 初代杵屋六翁歌碑のことなど
- 二 本調子部分の考察
- (1) 日本橋
  - (2) 江戸紫のあけぼのぞめや
  - (3) 江戸紫
  - (4) 曙染め
  - (5) 目もと美しくし御所ざくら…かをりに酔ひし園のてふ
  - (6) 御殿山
  - (7) 高輪
  - (8) 佃の合方
  - (9) 佃節

長唄「吾妻八景」考察

三 二上り部分の考察

- (1) はるかあなたのほととぎす、初音かけたか羽ごろもの
- (2) 江戸時代のほととぎすの名所
- (3) 駿河台
- (4) お茶の水
- (5) 水道橋
- (6) 台のよせいはいや高く
- (7) 神田山日輪寺
- (8) 花のにしきの浅草や、御寺を
- (9) 浅草寺
- (10) 浅草神社
- (11) 駒形
- (12) いづちへそれし矢大神
- (13) 紋日
- (14) 隅田川・荒川・浅草川・宮戸川・大川
- (15) 紙砧
- (16) 浅草紙

四 三下り部分の考察

- (1) しのもちぢずり、乱るる雁の玉章
  - (2) 雁の玉章
  - (3) きりのわたしに棹さす舟も
  - (4) みせすががき
  - (5) 見世を張る
  - (6) はちすによれる糸竹の
  - (7) 上野
  - (8) 不忍池
  - (9) 出合茶屋
  - (10) 楽の合方
  - (11) チラシ
- 後記
- 参考資料

一 長唄「吾妻八景」

(1) 「吾妻八景」の詞章

(本調子) 前彈 実げにゆたかなる日の本の、橋のたもとの初はつがすみ。江戸紫あけぼのぞの曙あけぼのぞ染めや。(合) 水上みなかみ白しろき雪ゆきの富士、雲うみの袖そでなる花はなの波なみ。(合) 目めもと美うつくくし御所みよ桜さくら、御殿みどの山やまなす人ひと群ぐんれの、香かり酔よひし園のりの蝶ちょう。花はなのかざしををかいまみに、青簾あおすの小舟おふね、歌うたう小唄こみづたの、声こゑ高たか繩なわ(高輪)に。

(佃ノ合方) (三上り) はるかあなたのもととぎす。初音はつねかけたか羽衣はつえの、松まつは天女てんじよのたはむれを、み保みほにたとへて駿河すまがはの名なある、台たいのよせいのいや高く、見みおろす岸いかにの筏いかだ守まもり。日ひを背せ負おふたる阿弥あみ陀だ笠かさ。法のりのかたへの宮戸みやと川がわ。流れ渡わたりにいろいろの、花はなの錦にしきの浅草あさくさや、御寺みでらをよそに、浮うかれ男おとこは、いづちへそれし矢や大神おほみかみ。紋もん日ひにあたる辻つじ占うらの、松葉まつばかんざしふたすじ二筋ふたすじの、道みちのいしぶみ、露つゆふみわけて、ふくむ矢立やたての隅田すみ川がわ。目めにつく秋あきの七草しちそうに、拍子かま通とほはず紙かみぎぬた。(佃ノ合方) (三下り) 忍しのぶぶもぢずり乱みだる雁かりの玉章たまずさに、たよりを聞きかん封ふうじ目めを、きりのわたしに棹さしさす舟ふねも、いつ越こえたやら衣紋えもん坂さか。みせすがかきに引き寄よせられて、ついぬつづけの朝あさの雪ゆき。積たまりり積たまりりて情なさけの深ふかみ。恋こひの関所せきじよも忍しのぶぶが岡おかの、蓮はすによれる糸竹いとたけの、調しらべゆかしき浮島うきしまの、かたなすもとに籠こもりせば、楽がくノ合方あひがた 楽がくの音ね共どもに東とう叡えいよりも、風かぜが降ふらする花はなもみぢ、手てに手てあはせて貴賤きせんの誓ちかひ。弁財天ひんさいてんの御影みかげもる、池いけのほとりの尊たうくも、めぐりてや見みん、八やつの名などころ。

(2) 開曲

文政十二年(一八二九)四月に開曲された。文政は、この翌年の十二月に天保と改元される。したがって、「化政期」と称される時代の最後の年に発表された曲ということになる。

(3) 作曲者・作詞者

作曲は、四代目杵屋六三郎(安永八年〜安政二年。一七七九〜一八五五)。十四歳で初代杵屋正次郎の門に入り、

文化五年（一八〇八）に四代目六三郎を襲名。立三味線に昇進。天保十一年（一八四〇）に六翁（初代）と改名した。十代目杵屋六左衛門とともに長唄中興の祖といわれ、作曲、演奏の両面で活躍した。七代目市川団十郎の知遇を得て、「勸進帳」を作曲したほか、「晒女」、「老松」、「廓三番叟」、「俄獅子」、「松の緑」などの名曲を残している。

正本に「杵屋六三郎述」とあるところから、六三郎自身の作詞と考えられる。

(4) 曲名・曲趣

「吾妻・東」は、都より東の土地。東日本の諸国。峰坂の関以東、遠江の国以東、箱根山以东などを指す場合があつて一定しないが、ここでいう「吾妻」は江戸の町をいっており、「雪の富士」を唄っても、それは江戸の町の中心点「日本橋」の橋上からの眺望であり、つまりは「江戸の富士」なのである。

「吾妻八景」という曲名からは八景物に属する曲ということになる。しかし、この曲は、「瀟湘八景」、「近江八景」の流れをひくものではない。既成の八景やその表現にとられず作曲されている。「八景物」については、神田外語大学紀要第十一号（一九九九年）「巽八景と八景物」、「長唄びいき」（青蛙房）を参照されたい。

「実に豊かなる日の本の」という唄い出しは、実に豊かに大きい。「巽八景」の「大江戸とならぬ昔の武蔵野の」も大きい。こちらは「尾花や（屋）招き寄せたりし」と料亭の名を出し、「恋と情の深川や」と粋にくだけるが、「吾妻八景」では、「水上白き雪の富士、雲の袖なる花の波。」と大きさを持続し、「雪の富士」や「花の波」のところは、河東節の節調が取り入れられており、特別の格調をそなえている。

(5) 「吾妻八景」の背景

「季刊邦楽」33号に「吾妻八景」の総合研究の成果が掲載されている。まず、吉川英史氏の説を一部紹介する。

「吾妻八景」の歌詞、その内容には、化政期に生きる江戸庶民にとつて、美しきもの、善きものが歌い込まれている。描かれているのは、千代田城や武家屋敷ではなく、御殿山の桜見物、吉原に遊ぶ庶民である。しかも、永く続いた平和の中に発展した文化の香りが漂っているように感じられる歌詞である。

次の天保期になると、世は国学の興隆から王政復古の風潮がきざし、大塩平八郎の乱などが勃発するし、外国からの圧力、いわゆる天保の饑饉、天保の改革など、厳しい時代に変化する。そう考えると、「吾妻八景」は、永く続いた平和時代の記念塔であるともいえ、時代の折返し地点の指標であるともいえる。

次に杵屋正邦氏の作曲についての意見を引用しよう。

(6) 作曲について

構成 前弾き・唄・合方・唄・合方・唄・合方・唄という曲の構成は、箏曲の大きな手事物の構成に似ていて、舞踊曲とは別趣の、唄、三味線ともに聴かせどころの多い、音楽のための音楽になっている。

調絃 調絃はまず本調子に始まり、やがて二上り、次いで三下りと、二回の上行転調を行い、各調絃の中で更に勘所（旋律）上の転調があつて、音高的にも極めて変化に富んでいる。

上調子 長唄の上調子は、他の三味線音楽よりも一般に技巧的で手がこんでいるが、特に「吾妻八景」では上調子が活躍して大いに効果を上げている。

正邦氏はさらに言う、「三下りになると途端に曲調がやわらかくだけ、粹いさめいて聞こえてくるのは、必ずしも三下りという調子の性格ばかりでなく、作曲者が意図的にそのような雰囲気をもたせたい曲節をつくり上げたからであろう。すなわち『忍ぶもじ摺り』以下は歌詞もなまめき、それを受けて曲もまた艶に軽い。ただ、調絃は三下りであるが、音の動きは本調子的である。」と。



初代杵屋六翁歌碑（不忍池 弁財天 境内）

(7) 初代杵屋六翁歌碑のことなど

安政二年（一八五五）十月二日の夜、いわゆる安政の大地震にあう。十一月二十一日、不忍弁天に参詣し、自作の歌碑が地震のために池の中に転落しているを見る。その夜から発熱、十一月三十日の夜、生涯を終わる。

辞世 濁りなく世をすましけり蓮の露

不忍池の池畔に建てられた歌碑には

たるまねば どなたもよしや

綱よりも 細き三筋の 糸の世わたり

とある。

現在の歌碑は戦災で倒壊埋没していたものが長唄協会の手によって昭和三十一年二月五日復興されたものである。



二 本調子部分の考察

「<sup>げ</sup>実に豊かなる日の本の橋のたもとの」の「豊かなる」からは「<sup>とよあしはら</sup>豊葦原」、「<sup>とよあきつしま</sup>豊秋津島」の「豊」を感じる。「日の本の橋」は言うまでもなく「日本橋」。

(1) 日本橋

この時（慶長八癸卯の年）日本橋をはじめて掛けらる。見聞集に云、大川なれば、川中へ両方より石垣を築出し掛けたもう。敷き板の上、三十七間四尺五寸、広さ四間二尺五寸なり。又云、この橋ご普請の時分、日本国の人あつまりて掛けたる橋なり。この橋の名を、人間は、かつてもつて名付けず。天よりや降りけん、地よりや出でけん。諸人一同に日本橋とよびぬること、希代不思議と沙汰せりと云々（『武江年表』）

池田弥三郎氏は、「日本橋」について次のように語っている。

日本橋は、もと、日本橋川（当時その名はなかったが）に架けられていた、粗末な橋で、その橋の様子から「二本橋」と言われていた。それが、江戸の町の造成につれて、立派に改修されていき、その途上で、誰言うとな<sup>く</sup>、二本橋は日本橋だと言われるようになっていった。そして、誰言うとな<sup>く</sup>言い出した「日本橋」という名を、誰もが素直にうけいられるように、日本橋はにぎわしくなり、付近は日本の代表の土地となり、さらに全国里程の中心となり、五街道発足点ともな<sup>って</sup>いったために、ますます「日本橋」の名がふさわしくな<sup>って</sup>いった。（『日本橋私記』わたしの橋名起原説より。「東京美術」）

(2) 江戸紫のあけぼのぞめや

日本橋橋上から見た夜け方の情景である。「橋下を漕ぎつたふ魚船の出入、<sup>あした</sup>且より暮に至るまで、<sup>あ</sup>嗽々としてかまびすし」と『名所図会』とあるように活気に満ちた、生き生きとした江戸町民の活動を背景にした「あけぼの」なのである。

(3) 江戸紫

江戸で染めた紫の染色の称。黒み深い古代紫に対し、色がやや浅く明るい。杉田仙蔵という多摩郡松庵新田の農夫が京都智積院の円光の協力を得て創始したという。仙蔵は原料を南部から求め、自ら栽培し、苦心の結果完成して江戸に流行はやらせたと伝える。

(4) 曙染め

染め色の名。曙の空のように裾を白地にして、上の方を紅色、または紫色でしだいに濃く染め上げたもの。

鎌倉を生きて出でけん初鯉 芭蕉

帆をかぶる鯛の騒ぎや薫る風 其角

日本一を二つ見る日本橋

\* 江戸城と富士山

橋までも江戸は日本の東なり

\* 江戸橋は日本橋の東方

みなかみ白き雪の富士

橋上からはるかに見る雪をいたたく富士。橋下はもちろん「日本橋川」である。

呉服橋御門外の北、一石橋から東のほう、日本橋、江戸橋等を経て永代橋際から大川へ注ぐまでの流れをいう。慶長五年関ヶ原合戦後、江戸の町割をした際、最初に掘りひろげた川筋である。

(5) 目もと美しく御所ざくら……かをりに酔ひし園のでふ

「御所桜」は、花卉は大形で、五輪ずつ一房となつて咲く。しかし、ここでは「御殿山」と対たいをとり、また

頭韻を合わせているだけで、桜の品種はかわりはない。「御殿山」の「山」から「山なす」と続け、「山なすひとむれ」と続く。「かをりに酔ひし園の蝶」とあるが、この「かをり」は、人々のかおりか、花のかおりかふと思うのは、「夢にや人の遊びけん、蝶や人とはなりにけん」という『胡蝶』の冒頭の一句である。ここの蝶、園の蝶と形容するにふさわしい遊女たちの艶やかな姿ととる考え方もある。

「花のかざしを、かいまみに」もわかりにくい。「かざし」を草木の花やその小枝を折って、頭に挿したものととるか。手や物などで、頭上を覆うこととするか。「かいまみ」ているのは「青簾の小舟」で「歌ふ小唄の主であろうか。長唄「花の友」には、「見渡せば、流れに浮む一葉の、なかの小唄の顔見たや。桜が物を言はうならば、さぞや愔りん氣きのたねである、粹すいなる隅田の水かがみ、焦れあうたる船のうち。」とある。

花よりも心の散るは御殿山

\* 品川宿の飯盛女の招きを思って。

次に「高縄」だが、小唄の声高たかくの「高」に重ねて「高縄」としただけではない。今でこそ高輪はとり立てて言うことのないところであるが、江戸の昔は特別の賑わいを見せた土地であった。

新内「蘭蝶」(若木仇名草) お宮のクドキに、「あの蘭蝶殿と夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互ひに同居衆。縁でこそあれ末かけて：」とある。「同居衆」(でいしゅ・でいし)は遊里語で、看板を借りて自前で稼ぐ男女の芸者や女郎をいう。そうした類の者たちの稼ぎ場であったのだ。

(6) 御殿山

長祿の頃(一四五七〜九)は太田道灌の館があった。江戸城が出来てあと、宇田川和泉守長清にここを守らせた。徳川の代になってからは、將軍の遊息の地となった。

春の頃は平原の地一面に桜が咲き揃って壯観である。立春から七十日目を最中とする。海辺に近く遙か



高輪大木戸跡 (江戸名所図会)

に房総の山々を眺め、白金から目黒の耕地を見晴し、菜の花の美しさは絶景である。〔遊歴雑記〕  
 享保の元文の頃(一七一五〜四〇)吉野山の桜を移植した。江戸時代の花見の場所の一つとして数えられていた。嘉永六年(一八五三)には海防のためにこの土を削って西川砲台を築き、文久二年(一八六二)には異国人の旅館が建てられた。

御殿山芝の響きで花が散り

\* 増上寺の晩鐘で

御殿山銀の扇に帆が映り

\* 高輪の帰帆

(7) 高輪

日本橋より高輪大木戸までおよそ一里三十丁ほどある。西に三田、白金、北に芝、南に品川があり、東は袖ヶ浦に臨む東海道往還路の片側町であり、大木戸より品川宿までが約八丁、むかしは海際のこの高地を高縄手となえたが、後年、高輪と改められた。

大木戸 宝永七年(一七一〇)西側の町屋の内、間口二十間、奥行き八間を召上げて建てた。土手石垣は横四間、長さ五間、高さ一丈。その後たびたび類焼にあつて柵門や門番所が焼失した後は、高さ一丈、長さ五間ほどの左右の土手石垣だけを残して放置され、いつの頃ともなく廃棄された。現在はその石垣の一部が

## 長唄「吾妻八景」考察



高輪大木戸跡（港区芝田町9丁目）

国道ぞいに残されている。

七軒 芝田町九丁目と車町との境、木戸ぎわまでの  
両側半丁ほどの間を七軒と呼んだ。古くは家数が七軒  
であったためという。品川宿と同じく、茶屋、旅籠が  
軒を列ねて、旅の者や送迎の者たちの遊興の場所となっ  
ていた。尾張屋、山口、花波屋、仲屋、泉屋、万屋、  
石沢などの料理屋と岡田屋、亀屋などの蕎麦屋があっ  
た。「江戸名所図会」に「七軒と云ふ辺は、酒旗肉肆海  
亭をまうけたれば、京登り、東下り、伊勢参宮の旅人  
を、餞り迎ふるとて来ぬる輩、ここに宴を催し、常に  
繁昌の地たり。後には三田の丘綿々とし、前には品川  
の海遙かに開け、渚に寄する浦浪の真砂を洗ふ光景な  
ど、いと興あり。」とある。

「川柳」はその場所柄をとらえていう。

高輪はにせと浅黄で持ったとこ

\* 僧侶と勤番侍。

\* 騎馬を生捕る高輪の茶屋女

\* 遠乗りの若侍

高輪までは釈迦のみ弟子なり

\* 増上寺あたりの僧の遊び

「青簾の小舟」は、こうした高輪の海に舟を浮かべての遊興であろうか。しかし、曲の趣きは次に続く「佃の合方」によって海というより隅田川をさか上ってゆく思いがする。

(8) 佃の合方

杵屋正邦氏は次のように解説している。

「隅田川の象徴的音型といっても差し支えない程、江戸時代の隅田川及びその周辺の描写に密着した佃の合方は、長唄ばかりでなくさまざまな三味線音楽に利用されているが、その中でも「吾妻八景」の佃の合方は特に有名である。しかし、佃の合方そのものは始めの四分の四拍子二小節だけであって、三小節目以降の左手は全く別の旋律を次々に展開、発展させてゆくのであるが、実は、ここにもまた佃の合方の地がその底流にずうっとひそめられているように思われる。」(後略)

(9) 佃節

隅田川を上下する屋根舟、猪牙舟の中で芸者が三味線に合わせて歌った唄。「吹けよ川風あがれよ簾すだれ、なかの小唄の顔見たや」というのが元うた。

\* 送り船島の横手を佃節

\* 深川の岡場所あたりへの船か。

三 二上り部分の考察

(1) はるかあなたのほととぎす、初音かけたか羽うころもの

長い合方が終わって二上りに転じ、「はるかあなたの」となる。市川春子氏はこの部分について、「充分に唄いますが、あくまでも叙景ですから、あまりクドキのようにならぬよう、拍子を乱さぬようにして、爽やかに唄います。『ほととぎす』は重くならぬようにきれいに高い音を出します。ちよつと弾んで出てもよいでしょう。距離感が出るように唄います。」と言っている。この「距離感が出るように」という言葉ではっとした。実は

私は「ほととぎす」を知らないのである。古くから夏の鳥として親しまれ、詩歌にも多く詠まれる。という知識はある。そしていくつかの詩歌をそらんじて、口ずさむこともある。しかし、その姿・習性・鳴きかた・鳴き声、どれについてもわかっていない。幸いにして良書に出合った。『続江戸の坂東京の坂』（横関英一著・有峰書店）である。次に一章を引く。

(2) 江戸時代のほととぎすの名所

初音の里——小石川の白山のあたりから、指谷町へかけてほととぎすの名所であった。この辺は初音が早く、ここから鳴きそめるといふ。付近に初音町があったが、これは鶯ではなく、ほととぎすの初音町であったといふことである。

お茶の水から駿河台にかけてほととぎすの名所と『江戸花暦』にあるが、ほととぎすの名所と鶯の名所とは、名指し方がちがう、鶯の名所は、たいがい梅の名所と一致するが、ほととぎすの名所は範囲が広い。ほととぎすは飛んでいるときだけに鳴くので、一声と一声の間に大きな距離がある。だから鳴き声が離れる。一声めは白山の人が聞いて、二声めは指谷町の人が聞く。それから、駿河台の人が第一声めを聞いたときは、第二声めはお茶の水の人が聞く。そして第三声めは菊坂の人が聞く。これがほととぎすの名所が離れていて範囲が広いわけなのであろう。

これで「距離感が出るように」唄わねばならぬことがわかった。

初物のてっぺんに鳴く時鳥

初物のてっぺん銭が入らず聞き

「初音かけたか」の「かけた」は時鳥の鳴き声「てっぺんかけた」の「かけた」をにおわせ、み保の松原で天女が羽ごころを松の枝に「かけた」意にかける。三保は駿河国の浜辺。そこで「駿河の名ある台の」が出てくる。





お茶の水 神田川と神田上水懸橋 (江戸名所図会)

駿河台は今でも駿河台下からお茶の水駅を目ざして上がって行くと、かなりの急坂である。しかし、その昔はこんなものではなかった。

(3) 駿河台

昔は神田の台という〔図会〕。神田山ともいう。江戸城の鬼門にあたる。駿河台の名は、むかし駿河の在番

に賜わたったためとも、駿河大納言(忠長卿)の屋敷として賜わたったものという。または駿河国の富士を望むためともいう〔駿河台志〕

家康は、慶長元年(一五九六)に駿河台の開拓に着手して、同八年三月三日に、二万石以上の諸大名に命じて神田山を崩して、その土で浜町から新橋までの海を埋め立てた。従って昔の神田山は今の駿河台のようではなく、遠く柳原土堤までも連なった一大丘陵であった。その時の役夫は、千石について一人の割りに課せられたので、俗に千石夫と名づけられた。京橋の加賀町、尾張町、出雲町などは、加賀、尾張、出雲の千石夫だけの手で埋め立てられた町である。(江戸に就ての話)

地名まで駿河三河は台に乗せ

\* 三河台は麻布。

(4) お茶の水

水道橋と昌平橋の間の断崖百尺の風景の良い場所をい



(5) 水道橋



神田川の流れ（聖橋から、見おろす）

う。朱舜水が中国の赤壁せきへきを小さく縮めたようなのが、お茶の水の風景だということから、彼はここを小赤壁と名づけた。

ここに井戸があつて將軍がお茶の水に召上がったという説、井戸ではなく、ここへ来ている水を將軍のお茶の水にしたという説、井の頭のお茶の水の下流であるという説、いずれも、將軍のお茶の水に用いたことにかかりを持つことに変わりはない。〔画報〕

『江戸名所図会』に、「小川町より小石川への出口、神田川の流れに架す。この橋の少し下の方に神田上水の懸樋かけとあり、故に号なとす。万治の頃まで、駒込の吉祥寺この地にあり。その表門の通りにありしとて、この橋の旧名を吉祥寺橋ともいへり」とある。樋は明治三十三年まで架かつていた。お茶の水を描いた絵には必ずこの懸樋が書かれている。

(6) 台のよせいのいや高く

「よせい」には「余情」（景色を添えること。）と「余勢」（満ちあふれた気力）との両様子の用法がある。神田川は断崖絶壁の下に流れている。JRお茶の水駅のあたりにわずかにその面影を残している。見おろす流れに見る「筏守り」である。「日をせおふたる阿弥陀笠」は、その筏守りの姿である。

川中を草履であるく筏乗り

馬子よりも風雅に見ゆる筏乗り

「阿弥陀笠」は、笠を、仏像の光背のように後ろに傾けてかぶること。「後ろしぶきに降る雨に、かたげて急ぐ阿弥陀笠」と、近松の『冥土の飛脚』にある。

この部分、「日を背負ふたる阿弥陀」から阿弥陀如来を本尊とする神田山日輪寺を指しているとする説もある。日輪寺は「吾妻八景」が発表された文政十二年（一八二九）よりはるか以前の慶長八年（一六〇三）に、浅草寺の西となり、現在の台東区西浅草三丁目の内に移っているので、ここに日輪寺を持ち出すには少々無理を感じる。「阿弥陀笠」に続く「法のかたへの宮戸川」での「法」を日輪寺をさすとするもの、東本願寺をさすとするものがある。「宮戸川」は隅田川であるから、理屈っぽく言えば、どちらにしても「かたへ」という言葉にはなじみにくい。そこで私は、この「法」は宮戸川に縁の深い「浅草寺」を思つて喩うことにする。「花の錦の浅草や、御寺」の「御寺」は言うまでもなく浅草寺であるから、「法」を浅草寺をさすとするのでは重なると思わなくはないが。

「日輪寺」については、『江戸名所図会』から引用しておく。

(7) 神田山日輪寺

芝崎道場と号す。誓願寺の北の方にあり。本尊阿弥陀如来は安阿弥あんあみの作なり。当寺は時宗にして、当国弘法最初の道場とぞ。相州藤沢清浄光寺しやうじやうくわうじに属せり。開山真教坊は一遍上人第二世にして、往古諸国遊化むかしの頃、当国豊島郡芝崎村に至るに、かしこにひとつの叢祠そうしあり。（神田明神これなり。今の神田橋御門の辺旧名を柴崎村といへり。）その傍かたはらに一字の草庵を結び芝崎道場と号す。（当時の権輿けんよなり。）その後あまたの星霜を経て、慶長年中神田明神は駿河台へ遷され、当時は柳原のもとに地を賜ふ。又明暦の頃今の地にうつる。

日輪寺の現在地への移転には明暦三年（一六五七）の江戸大火後という説もある。昭和四十年まで、この付近の町名を芝崎町といった、その町名は日輪寺の旧地の名に由来する。国際劇場の跡に建つビューホテルの近

くにある。

(8) 花のにしきの浅草や、御寺を

(9) 浅草寺

東京都台東区にある聖観音宗の総本山。金竜山と号す。坂東三十三所観音の一三番。推古三二六（六二八）ひび前浜成・武（竹）成兄弟が宮戸川（隅田川）から一寸八分の黄金の観音像を引きあげ、土師真中知はじのまなかの自宅に祭ったのが始まりという。天慶五年（九四二）平公雅が再建、一一世紀半ばに寂円が再興した。源頼朝や足利尊氏らが寺領を寄進し、徳川家康の江戸入府後はその保護を得て隆盛した。火災のたびに幕府の援助で再建された。同寺を中心に浅草は江戸の盛り場として繁栄。五代將軍綱吉のとき寛永寺の支配下におかれた。昭和二〇年（一九四五）戦災で焼失。一九五〇年天台宗から独立し、一九六三年本堂再建。伝法院は同寺の本坊。

三人で六分づつ引く宮戸川

観音像を引き上げたと伝えられる三人は浅草神社に神として祀られた。

(10) 浅草神社

浅草三社権現・三社明神・三社さまとも。祭神は土師真中知命・檜前浜成命・檜前武（竹）成命で、はじのまなかのみこと 大国主命を合祀。三社権現は浅草寺鎮守として近世初期から記録にみえ、浅草寺とともに厚く信仰された。明治元年（一八六八）神仏分離令で分離。例祭は五月一七・一八の三社祭で、江戸三大祭の一つ。

観音像が発見されたのは三月十八日といわれ、明治の改暦以前の三社祭りは三月十七・十八日に行われていた。境内には多くの句碑の類がある。

女房も同じ氏子や除夜詣もうぢ

初代中村吉右衛門

翁の文字まだ身にそはず衣がへ

二代目市川猿之助



二天門（浅草寺境内）



殺生禁断の碑  
(駒形堂境内、台東区雷門2-2)

竹馬やいろはにほへとちりぢりに

久保田万太郎

雷は田町<sup>\*</sup>をよけて鳴り渡る

初代花柳寿輔

\* 寿輔は浅草田町に住み、雷もよけて鳴るほどやかま

しい存在で、雷とあだ名されたという。

(11) 駒形

駒形は浅草寺本尊の観音像が最初に安置された場所との言い伝えもあり、駒形堂のそばに浅草寺領内は殺生禁断の地とするという「浅草観音戒殺碑」も残る。

そうしたことから、私はふと思った。「法<sup>りつ</sup>のかたへの宮戸川」の「法<sup>りつ</sup>」は、この駒形堂を思つての句ではないかと。

(12) いづちへそれし矢大神

浅草寺境内から馬道へ抜けるところにある矢大神門（隨身門）から浮れ男<sup>うきお</sup>は矢のそれるようにそれで吉原へ向かうのである。

八脚門の切妻造りで、元和四年（一六一八）、日光東照宮造営と同時に浅草寺内に勧請した東照宮祈願所の廟門であり、豊磐間戸命<sup>とよいわたののみこと</sup>、櫛磐間戸命<sup>くすいわたののみこと</sup>の二像を安置したが、寛永三年（六二六）に本宮御神体を城内紅葉山へ遷座し、寛永十九年（一六四二）二月の火災で浅草寺本堂とともにこの旧宮も焼失したので、後には浅草寺の横門のようになり、馬道の方へ抜ける人を見送る



二天門下より観音堂を見る

(13) 紋日

廓で衣服を着替えなどする重要な祝日。『色道大鑑』には、「家々の紋のやうに、定まりたることによりて紋日といふ」とあるが、また物日のうち紋付を着る日の略だという説もある。一月は松の内、十一日、十五日、十六日、二十日。二月は十日。三月は三日。五月は五日。七月は七日。九月は九日など。それに吉原では三月十八日の三社祭、六月一日の富士詣、七月十日の四万六千日、八朔白無垢、八月十五日の名月、九月十三日後の月、十二月十七、十八日の浅草歳の市などがあつた。

紋日には遊客は昼夜の揚代を払うのがきまりであつたそうだ。女たちにも出銭でせんがかさむ。男衆たちから遣手やりてのおばさん、それぞれに何がしの祝儀を出す。客の方もなじみともなれば、女の顔の立つような金の使い方をしなければすまない。

紋日ともなれば女は思う客が来るか来ないかは気にかかるどころの問題ではない。そこで、「うらない」ということになる。「辻うら」は①四つ辻に立つて最初に通つた人のことばで吉凶を判断すること。②吉凶をう

だけのものとなつた。

抜けるのを弓矢を持ってねめてゐる

どうしやうの相談を聞く矢大臣

それる筈矢大臣から抜けて行き

明治元年（一八六八）の神仏分離今以後は浅草寺の「二天門」と呼ばれ、増長天と持国天とを安置する。この二天像は昭和三十三年、寛永寺の嚴有院げんゆういん（四代將軍家綱）靈廟の勅額門から移したものである。慶安年間（一六四八〜五二）の作。

らなう文句を書いた紙。また、それを売る人。などの意で用いられるが、ここでは「松葉かんざし」とあるから、松葉の形に作った、二またのかんざしを畳の上へ投げ、その端から畳のふちまでの畳の目の丁半を数えて「来る来ない」を判断する「たたみ算」であろう。

『四季の山姥』（文久二年（一八六二））には、「髪の乱れをかき上げながらたたみ算。」とある。

「ふたすぢの」といったところから「道のいしぶみ」の語が出てきて、「いしぶみ」・「露ふみわけて」・「ふくむ」と、「ふたすぢの」に始まる同種の韻を重ね、さらに「ふくむ矢立の」を受けての「すみだ川」の「すみ」には「墨」の意が掛けられている。このあたりは縁語、掛詞の類を巧みに連ねての作詞であり、「道のいしぶみ」、「矢立」にこだわるほどの意味はないように思う。

(14) 隅田川・荒川・浅草川・宮戸川・大川

荒川は東岸綾瀬川と落ち合うところまでの呼び名で、それより下流、東岸の隅田村に沿う三里ほどのあいだを隅田川、浅草大川橋（吾妻橋）より下流、両国橋のあたりまでを浅草川、ここはむかし宮戸川ともいった。大川は形容から出た名称であるから、この川の総称と考えてもよく、また両国橋より品川の入るまでの呼び名と考えてよからう。（『文政江戸町細見』）

(15) 紙砧

浅草紙を製するためにつ砧。原料である一度使った紙を水に漬けて置き、これを白く晒すためにうつ。

(16) 浅草紙

昔は新吉原遊廓から出る鼻紙屑、及び諸方から集まる襦袢等を原料とし、浅草山谷辺で漉き返えして作った紙を浅草紙といい、よく落し紙に用いられた。粗末な鼠色のもので、「浅草寺誌」によると、古くは田原町で漉いたとあるが、のちには鳥越から千住の辺で漉いたようである。

寝ぬ里へひびく山谷の紙砧

浅草の名物観音海苔と紙

「寝ぬ里」は、言う間でもなく吉原の廊。

浅草紙には上中下の三種類があつて、上は一貫文に付き六束、一帖四十八枚切。中紙一貫文で十束。下紙が十三束。(『御府内備考』文政十二年(一八二九))。

ここでの「紙ぎぬた」は浅草紙を作るための砧の音であり、詩にうたわれる、僻地にある夫を思いつつ、若き妻が打つ寒夜の砧の響きではない。しかし、雑な紙を打つ砧だからといって雑に弾いたのでは「吾妻八景」の「砧の合方」にはならない。

杵屋正邦氏は次のように言う。

「遅く静かな出に始まつて次第に速度を上げ、タタキ撥、スクイ撥、ハジキ、ウラハジキ等を駆使して、長唄三味線の真価を遺憾なく發揮出来るように作曲されている。上調子は砧地と呼ばれる一定の高さでチリンチリンと同じリズムを刻む手を続けるが、時折、本手の中に加わつて追いつ追われつの交互演奏を行う。」

#### 四 三下り部分の考察

(1) しのぶもぢずり、乱るる雁の玉章たまつぎ

「しのぶもぢずり」は「乱るる」をいうための序詞的はたらきをしている。「みちのくのしのぶもぢずり誰故に乱れそめにし我ならなくに」(伊勢物語)

(2) 雁の玉章

昔、中国で、蘇武が雁の足に結び付けた手紙が漢の帝に届いたという漢書かんじょの故事による。手紙、便り。

『巽八景』に、「ごんとつくだの辻占に燃ゆる炎ほむらのかがり火や。せめて恨みて玉章たまつぎを薄墨うすすみに書く雁かりの文字。」(二



世立川焉馬・天保十年（一八四〇）とある。

女の乱れる思いをこめた文の封を切り、男はその思いに自らも心を乱し、実は心おどらせて足を北国（吉原）へ向けるのである。

(3) きりのわたしに棹さす舟も

「きり」は「封じ目を」を受けて「切り」の意をかけて用いていることはすぐわかるが、「きりのわたし」がわからない。

『長唄全集』（日本音曲全集）や『長唄名曲要説』（浅川玉兔）など多くの書は、最後の渡し船。としているが、大久間喜一郎氏は「地名配列の上からみて、どこか渡しだかわからない。秋の季節だから一応『霧の渡し』と理解し」と述べ、「手紙の封じ目を切って読むとすぐに、霧の立ちこめた渡しを舟で越えたように、いつ衣紋坂を過ぎたのやら上の空で、…」と通釈している。

稿者は『江戸語大辞典』（前田勇編、講談社）に「きりぎりす 二挺立ての小舟で、屋根のあるもの」とあり、『嬉遊笑覧』（巻二下、「器用」舟）に「二丁立の小舟にやねを付たるをきりぎりすといふ。吉原がよひの船なり」とあるのに着目した。さらに同書には「鑑屋仁左衛門といふ舟宿がいふ。（中略）舟いそぐ故に、槽の音が二丁できりぎりすと鳴故に名付ましたといふに、皆大笑になりぬ」とある。これは『紫の一本』（天和三年・一六八三年）から引いたものであり、『墨水消夏録』（文化一四年・一八一七）も「二丁立の船に小さい掩いをした船をいう。吉原通いの船である。漕ぐとき、きりきりと啼くからという。」と「きりぎりす」の名の由来を語っている。鑑屋なる舟宿の亭主の話の終わりに「皆大笑になりぬ」とあるから、これらはすべてこじつけかも知れない。しかし稿者はそのこじつけに悪乗りして、次のような情景を思い浮べる。

矢大臣門からそれて馬道へ出た「浮れ男」（お大尽を気取っている男）は、やがて待乳山のふもと聖天町に



長唄「吾妻八景」考察



山谷堀跡（雨水が川のように見える）

かかり、山谷堀に入る、もちろん、船。それが「きりぎりす」。  
「山谷橋から河口までは慶長中御城普請の際、砂礫の搬出とともに川幅がひろげられたので、吉原通いの猪牙船や屋根船が今戸橋をくぐって漕ぎ入ることができ、南岸に並ぶ船宿はことに繁昌した。」と『浅草志』は伝える。

川柳にいう、待乳山今では猪牙ちよぎの目あてなり。

「わたし」といっても対岸に人をわたすための「わたし」ではない。無理を承知で言えば現世うつしよの極楽世界へ渡すたよりの船だ。清元の「梅の栄」に「かのもこのものを都鳥、いざ言とはん恵方さへ、よろづ吉原さんや掘」とある。川幅は六間。今は埋め立てられて散歩道。

「棹さす舟」のままでは衣紋坂ふもんには越えられない、「船から上がって土手八丁」、日本堤たよちから田町を越えて衣

紋坂にかかるのである。

田町では反り衣紋そではのめる也

不男ぶおとこも坂につくろふぬき衣紋

清元の「北州」には「衣紋つくろふ初買の、袂ゆたかに大門の……。」とある。衣紋坂は日本堤から新吉原大門口へ下る坂。五十間にあるところから五十間道の名がある。

(4) みせすががき

吉原で毎日暮れ六ツ、各樓神棚の鈴を合図に、内芸者、又は番に当った新造数名が、神棚の前に列んで弾く三味線をいう。この間に遊女たちは張り見世の座に着くが、出揃うまでは繰返して弾いた。

(5) 見世を張る

遊女が見世に居並んで客の見立てを待つことをいう。昼見世は正午から四時、夜見世は六時から十時（実は十二時）まで。どちらも鈴の音を合図にすががきの伴奏で出た。

がら／＼と鳴らせば狎あへも見世を張り

昼見世。武家は暮れ六ツの門限が厳しいので、多くは昼間来遊した。そのため正午頃この頃のより四時頃みなつまでを昼見世と称して見世を張ったが、いつか二時近くやつより六時近くむつまでとなつた。

さて、「みせすががきに引き寄せられて」での「みせすががき」を張り見世の座に着くまでに張く三味線ととるか、遊客の心を浮き立たせる騒ぎの三味線、鳴物の音ととるか。先に出た「きりのわたし」を、最終の渡船、などととると、暮れ六ツに弾く「みせすががき」ではあり得ない。

もつとも、女の手紙に心おどらせて衣紋坂を越え、大門をくぐつた男と、みせすががきに引き寄せられた男とが同一人物であるのかどうかもわからない。ふと思つ、「吾妻八景」の詞章は、「双六すわく」なんだということ。双六は一つずつ前に進むとは限らない。一つ休みもあれば、二つもどるもある。

作者の目線は思いのままに移り、転じているように思える。曲はすんなりと続いている。しかし、その間に、たちまちに季節は移る。「衣紋坂」までは秋の気配。居続けの男の見るのは「朝の雪」。そして舞台も吉原から「忍が岡」、「不忍池」のほとりに移る。

(6) はちすによれる糸竹の

「はちす」は「蓮」<sup>はす</sup>に同じ。実の形が「蜂の巣」に似ているところからという。蓮の葉や茎からとる蓮の糸は、極楽往生の縁を結ぶものにたとえる。「糸竹」<sup>いとたけ</sup>は「糸竹」<sup>いとたけ</sup>の訓読。「糸」は弦楽器、「竹」は管楽器。楽器の総称でもあり、それらを演奏すること。音楽。

(7) 上野  
このあたりは音楽の神とされる弁財天を祀る浮島を出すための詞章であり、やがて「楽」<sup>がく</sup>につないでゆく。

江戸城の鬼門に当たるといので、その鎮護祈願のために、家康を祀る東照宮と、京都比叡山にかたどる東叡山寛永寺が建立された。忍が岡という別名があり、山下に広小路の盛り場、不忍池の弁天、出合茶屋などがある。

上野から屋根を見つけて謀反也

\*吉原の屋根

\*籠の鳥花の上野へ放生会

\*吉原遊女の花見

(8) 不忍池

「天台止観の湖水、浪しづかにして紅白の蓮、玉を吐て旭をむかへ、葉は水面を覆てただ芝生のごとし。池の見わたし三四町長五七町ほど、源は谷中千駄木の谷々の流をうけたり」(『江戸砂子』)

弁天島は人工の島で、『江戸砂子補正』に、「水谷伊勢守、浅草川御普請御手伝済、領地の人夫を以て比島を築、崇源説院御父、浅井備守長政より伝来の、竹生島弁財天正写の像を、天海僧正に命じて安置す。」とある。

(9) 出合茶屋

池の名と相違の客の来る所

不忍の茶屋で忍んだ事をする

不忍池の南岸に新地を築き、料理茶屋・楊弓店・講釈場などを設けたのは寛政頃といわれ、これはその後取りこわされたようだが、「増補武江年表」によれば文政三年にも南西端に新土手を築いたという記事がある。桜や梅なども植え、料理茶屋や水茶屋も軒を並べ、昼も弦歌の音が池にひびくという歓楽郷であったようだ。

ひそひそと繁昌をする出合茶屋

不屈な屏風を池へ立て回し

弁天で見れば新土蛇のやう

「かたなすもとに、こもりせば」は後に続く『楽』の音律からいえば、まことに神妙な「おこもり」であるが、池畔のおもむきからは、そうとばかりは言えない。

(10) 楽の合方

「楽の合方」について杵屋正邦氏は「調子が三下りだけに他の本調子による楽の合方より印象がやわらかい。」  
 と言ひ、田島佳子氏は上調子について「これまでの佃の合方、紙砧の合方の上調子は替手形式の部分はわずかで、あとはオクターブと打合せ部分の多い手がついていますが、この楽の合方のみ、本手とは全く異なつた独立した旋律で最後まで演奏しているところが、他の曲の上調子と違つた面白いところと思います。」と語っている。

(11) チラシ

楽の合方が上がつて最後の唄の部分にはいる。舞踊曲の構成でのチラシにあたる部分である。詞章は他の部分とは趣きを異にする、格調をもつたものである。

「花もみぢ」は、①春の桜の花や秋の紅葉。花と紅葉。春秋の自然美を代表する。②花のように美しい紅葉。「吾妻八景」の構成・展開については、春に始まり、夏・秋・冬と四季が描かれているとか、早暁に始まっ

て夜に至るとかいわれている。そうであるかも知れない。しかし私は、作者はもつと自由な発想で、前にも述べた、双六的展開をとり、ある時は着実に季節の推移をたどり、ある部分では後もどりをして曲を構成しているように思う。

「チラシ」の部分には、季節・時間のしぼりはないと考える。したがって「花もみぢ」を①の意にとる。

「御影もる」の「御影」は、神や天皇などの霊魂。「御陰」とすると、神や天皇などの恵み。恩恵。の意になる。「もる」は「漏る」ととれば、したたる。「守る」とすれば、守る。この場合、両様の解釈ができよう。

① 弁財天の恩恵のしたたる、池の…。

② 弁財天のみ魂を守る、池の…。

「池」の縁語という点から考えれば①となろうか。

終曲の部分「池のほとりの尊くもめぐりてや見ん、八つの名どころ」は理解しがたい。一気に唄い納めてしまえば、別に気にならないのだが、字づらだけをながめていると疑問が生じる。「八つの名どころ」は「弁財天の御影もる、池のほとり」にあるというのだろうか。それではここまで唄ってきた「名どころ」はなんだったろう、ということになる。

そこで想像をたくましくして思う。「池のほとり」は作者六翁の住居「池の端」を暗示しているのではないのか。六翁は新しく成ったわが家からなじみ深い江戸の町々、名どころを見るかす、そうした思いを結びの一文にこめたのかとも思われる。

「吾妻八景」は、どのような席で開曲されたのか、わからない。私は池畔に建つ「六翁歌碑」の前で蓮の花を眺めながら、何とはなしに思った。池の端の新居での開曲、それを聞き入ったのは六翁を敬慕する一門の人々とひいきの面々。

後記

NHK「ラジオ深夜便」の「邦楽夜話」に始めて五年めに入る。月一回だが、それでも五十回に近い。宇田川清江さんのリードで曲をお聞かせしながら曲の成立やら中みやら、背景・伝説などを話す。テレビの「芸能花舞台」、ラジオ第二の「邦楽の楽しみ」でも話す。おかげで決った時間のうちに話を終えることができるようになった。しかし、とかく万事が解説的になって、曲そのものの味わいをそこねたり、曲から遠ざかったりしているようにも思う。「吾妻八景」の考察についてもそのくらいがないでもない。

参考資料

- |               |         |       |
|---------------|---------|-------|
| 日本史広辞典        | 石井進ほか編  | 山川出版社 |
| 古語大辞典         | 中田祝夫編   | 小学館   |
| 江戸語大辞典        | 前田勇編    | 講談社   |
| 江戸語事典         | 三好一光編   | 青蛙房   |
| 日本音楽大事典       | 平野健次ほか編 | 平凡社   |
| 江戸名所図会        | 鈴木棠三校註  | 角川書店  |
| 江戸・町づくし稿      | 岸井良衛編   | 青蛙房   |
| 文政江戸町細見       | 大塚稔編    | 雄山閣   |
| 日本橋私記         | 池田弥三郎   | 東京美術  |
| 季刊邦楽33号「吾妻八景」 | 吉川英史ほか  | 邦楽社   |

長唄「吾妻八景」考察

長唄・新稽古本「吾妻八景」

長唄名曲要説

川柳大辞典

吉住小十郎

浅川玉兔

大曲駒村編

邦楽社

邦楽社

高橋書店